

## 関連学会印象記

# 第21回日本冠疾患学会学術集会

神田 圭一\*, 夜久 均\*\*

去る12月14日、15日の2日間、京都府立医科大学大学院医学研究科心臓血管・呼吸器外科学の夜久 均外科系会長、京都大学大学院医学研究科循環器内科学の木村 剛内科系会長のもと、国立京都国際会館で第21回日本冠疾患学会が開催された(写真1)。

冠疾患治療の中心的存在である冠血行再建法としては、カテーテル治療(PCI)ではステント留置がルーチンになり、さらに2005年からはDrug Eluting Stentが保険償還の対象になると同時に非常な勢いで普及した。また冠動脈バイパス術では、動脈グラフトの有用性が確認され、両側内胸動脈が普通に使われるようになり、また手術の低侵襲化が時代のキーワードとなり、心拍動下冠動脈バイパス術が特に日本では6割の冠動脈バイパスに適用されるまでになってきた。一方、冠疾患の予

後を左右する病態として虚血性心筋症、虚血性僧帽弁閉鎖不全に対して注目が集まり、虚血性心筋症に対しては非移植治療としての左室形成術が盛んに行われるようになり、また血管再生治療はこの病態にすでに臨床応用され、さらに心筋再生治療も研究が進んでいる。虚血性僧帽弁閉鎖不全に対してはそのメカニズムが詳細に解明されてきており、それに伴ってそれに呼応する形で外科手術も工夫されるようになってきた。

本学会では、それらの進化してきた内科外科治療を早期・遠隔期治療成績を基に再確認し、内科外科を越えた形で戦略として再統合し、さらに予防も含めた冠疾患に対する総合的アプローチの将来を展望する一助になる学会にしたいという意味で、そのテーマを「冠疾患に対する治療戦略の再認識と将来への飛躍」とした。



写真1 木村 剛内科系会長(右)と夜久 均外科系会長(左)

\*京都府立医科大学大学院医学研究科心臓血管・呼吸器外科学(大会事務局長)

\*\*同 (外科系会長)

12月14日, 15日は冷え込みが強い2日間であったが, 幸い天候には恵まれ平日であるにも拘らず, 初日より多くの方々のご参加をいただいた。会場の国立京都国際会館は会場が広く, 少し閑散とした感じを受けたのだが, 実際には会期中の2日間で医師572名, コメディカル110名の計682名と主催者の想定以上のご参加をいただき盛況の上に閉会する事が出来た。

大会第1日目には本学会に特徴的である内科・外科の合同カンファレンスが2つ行われた。一つは『PCI・CABGのガイドラインを考える』, もう一つはここ数年シリーズ化している『あの症例はどうなった? この症例をどうする? (1)』であるが, いつもながら内科系・外科系の枠を超えた白熱した論議がなされ, やはり当学会の目玉商品であった。更に3つの内科系シンポジウム『冠疾患における心腎連関の重要性』『冠疾患患者の心臓突然死: いかにして予測し, どう防ぐか』『PCIの適応を考える: PCI vs. 薬物治療』, 2つの外科系シンポジウム『虚血性MRの病態と治療戦略(ビデオシンポ)』『虚血性心筋症に対する外科治療の遠隔成績』が行われた。

また当学会はコメディカルスタッフの参加が大きな位置を占めるというのも特徴の一つであり, 内科系コメディカル, 外科系コメディカル, 看護系コメディカルなどの幅広いシンポジウムが企画された。

中でも午前中に行われたコメディカル一般シンポジウム『冠危険因子是正のための指導と継続的サポート』では内科・理学療法・栄養指導・看護など様々な視点から冠疾患に対する予防・外来治療・入院治療・退院後外来治療および指導に至るまでの長期にわたるサポートの重要性が議論され, 医師の視点のみからは日常捕らえにくいポイントに注目する機会を与えられた。

また外科系コメディカルシンポジウムとして話題性の高い『Mini circuit CABGの現状と展望』が行われた。

また様々な講演会が初日より盛り込まれた。外国人講師 Dr. John R Liddicoat を迎えた招請講演『Emerging Opportunities in the Management of Structural Heart Disease』, 教育講演『医療における品質管理の視点』『循環器領域における MRSA 感染症の予防と治療』, 特別講演『冠攣縮—診療の

歴史と現状—』, コメディカル教育セッション『アンギオ室における基礎知識(これだけは知っておこう)』など幅広い分野と内容で非常に興味深いものであった。

口頭発表による11の一般セッションが行われたが, 内科系・外科系2名の座長により進行される事も本学会の特色である。ここでも専門領域を超えた盛んな議論が行われた。

また23のポスターセッションが行われた。

更に日中のセッション中に第11回再灌流フォーラムが行われた。

日中のセッションが終了後も2つの内科系ファイヤーサイドセミナーと1つの外科系イブニングレクチャーが行われた。

2日目は早朝から2つの内科系モーニングレクチャーと2つの外科系モーニングレクチャーが行われた。

3つの合同シンポジウム『急性冠疾患群のマネージメント: 血行再建—合併症の予防と治療まで』『冠動脈CTを診療にどう生かすか?』『理想的な冠血行再建をめざして』, と1日目に引き続いて『この症例をどうする? (2)』が行われた。

更に内科系シンポジウム『PCIにおける薬剤放出性ステントの位置づけ: 日本での現状と未来』, 外科系ビデオシンポジウム『CABGにおける私の工夫と成績』, 内科系コメディカルシンポジウム『画像診断における最新情報 MDCT の現状と未来』が行われた。

また最近関心の高い医療訴訟を取り上げた特別シンポジウムとして『PCI合併症のマネージメントと医療訴訟』が行われた。

2日目も初日に引き続きバラエティーに富んだ講演が企画された。(3人の)外国人講師 Dr. Lorenzo Menicanti, Dr. Christian Michael Spaulding, Dr. Dominick J. Angiolillo による(3つの)招請講演, 教育講演『MRIによる心筋バイアピリティー評価』, 特別講演『冠動脈造影の導入からPCI確立まで』が行われた。

午後からは看護系スタッフが中心となり, 看護士・栄養士・理学療法士のボランティアによる『メタボリック症候群の市民相談室』が開催され, 血圧・ABI・体脂肪率の測定やコンピューターによる判定, 日常生活における様々な指導が個人レベ



写真2 市民公開講座で講演いただいた、モスクワオリンピック 50km 競歩金メダリストでその後心移植を受けられたハートヴィヒ・ガウダー氏(右)。

自らの体験から健康管理におけるウォーキングの重要性を世界各地で講演されている。非常にエネルギーギッシュな人である。



写真3 外科系の外国人ゲスト Dr. Menicanti(イタリア)と Dr. Sabik(アメリカ)に京都の「伝統文化」を堪能していただいた祇園での1コマ。

ルで行われた。

その後外科系・内科系の両会長による進行で、3名の内科系講師、1名の外科系講師、モスクワオリンピック 50km 競歩の金メダリストにして心移植のレシピエントのハートヴィヒ・ガウダー氏を講師に加えて市民公開講座が行われた(写真2)。

写真3 は会期中の夕食の1コマである。外科系外国人ゲストと祇園にくりだし、京都の「伝統文化」を堪能していただいた。

主催者としては実際には一つの講演やシンポジウムをじっくり聴く機会はなかったが、循環器系に携わるあらゆる職種の方にも興味を持っていた

だけの学会になったのではと自負している。ただ、色々な面で行き届かない部分、また準備不足の部分も多々あり、この場をお借りして深謝する次第である。

日本冠疾患学会の理事長が相澤忠範先生(心臓血管研究所)から落 雅美先生(日本医科大学)に引き継がれ、また益々この学会が循環器疾患の予防・診断・治療の発展に寄与することを期待している。

なお次回 22 回の当学会学術集会は 12 月 12 日・13 日、京王プラザ(新宿)で、齊藤 颯先生、南 和友先生の下で行われる予定である。奮ってご参加いただきたい。